

# 教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 三枝 恵子  
学位：学士（教育学）

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
複合新領域、教科教育学		教科教育学（家庭科教育及び指導法）、ジェンダー、食物学		
主要担当授業科目	家庭科指導法、家庭、食物環境Ⅰ、Ⅱ ジェンダー論Ⅱ			
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概要		
1 教育方法の実践例  東京成徳大学	平成19年～	講義では毎回資料を配付することで、講義の予習・復習に活用でき、また欠席した学生には授業理解の参考になると思う。授業内容は、身近なテーマに視点をあて、調査データや映像資料、情報機器の活用を心がけている。また、学生同士の討論の時間やグループワークの導入により、主体的な学習活動と授業理解を深めている。		
2 作成した教科書、教材 ① 「高等学校家庭科教科書『生活技術』（教育図書） ② 高等学校家庭指導資料（文部科学省）	平成5年～ 平成4年～	第1章「家庭の機能と家族関係」執筆  「文部科学省高等学校家庭指導資料作成 協力者会議委員」として「高等学校家庭指導資料」作成に関与		
3 教育上の能力に関する大学等の評価  東京成徳大学	平成9年～	学生による授業評価では、具体例を挙げた講義・説明がわかりやすく理解を深められる。また、討論やグループワークを通して身近な課題に気づき、学びの継続が図られるとの評価も得ている。		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		特記事項なし		
5 その他				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概要		
1 資格、免許 教員免許状 小学校教諭普通免許状 中学校教諭普通免許状（家庭） 高等学校教諭普通免許状（家庭）	昭和46年3月			
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 『好かれる教師はどこが違うか』オビニオン叢書	共著	平成10年6月	明治図書	学級担任への子どもからの評価、教師と子どもの関係に視点をあて調査分析したものである。子どもたちの居心地の良さや担任への満足度や信頼感は日々変化するものである。そこで1年間に同じクラスを2回調査し、子どもたちの担任評価やクラスの満足度を分析し、子どもにとって理想の教師像とはどのようなものか明らかにした。

				(全 128 頁) 担当部分：第IV章「中学生は担任をどうみているか」(p67～p87) 【関連授業科目】家庭科指導法
2 『徹底解剖「学級の荒れ」』	共著	平成 12 年 6 月	学文社	「学級崩壊」が社会問題化し、新聞・テレビ等のメディアで話題になっている。現場教師に話を聞くと報道されていることとのギャップを感じる。そこで、教師と子どもたちに調査し「学級崩壊」といわれる実態を分析した。本書の構成はⅠ討議編とⅡ調査データ編からなり、三枝は調査データの一部を執筆した。(全 183 頁) 【関連授業科目】家庭科指導法
3 『育児不安の国際比較』	共著	平成 20 年 5 月	学文社	育児不安の要因を構造的に明らかにすることを目的に 1999 年からの調査研究をまとめたものである。育児不安の構造は核に「子ども好きでない」「親性の未形成」「子育てが楽しくない」「性格の堅さ」「自尊感情の低さ」「社会性のなさ」等の心的要因があり、それに環境要因の「母親の属性」「子育ての大変さや苦勞とその連続性」「子どもの気質や健康状態」が絡み合って構成される。さらに母親の育児不安傾向を強める要因に母親自身の子どもの時代の子育てや家庭環境が影響していることを分析しまとめた。(全 208 頁) 担当部分：Ⅰ章 育児不安の構造(p27～p45) 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法
4 『ユビキタス社会の中での子どもの成長』	共著	平成 22 年 7 月	ハーベスト社	日本子ども社会学会共同研究事業プロジェクト委員会による子どもの成長に影響する携帯問題に関する研究をまとめたものである。中学生の携帯利用について全国調査を実施するとともに、中学教師に携帯の評価と学校での対応を尋ねた。同時にネットいじめなどにメスを入れるため、裏サイトなどの問題を質的に掘り下げる調査も試みた。三枝は 1-2『子どものケイタイ利用の現状から見えてきたもの』を共同執筆した。 (全 206 頁) 担当部分：1-2 子どものケイタイ利用の現状から見えてきたもの (p10-p30) 【関連授業科目】家庭科指導法
5 『子ども問題事典』	共著	平成 25 年 7 月	ハーベスト社	本書は、日本子ども社会学会による、現代の子どもの問題とその解決のために多領域の専門的知見をまとめたものである。日本子ども社会学会研究刊行委員編 代表深谷昌志 (全 255 頁) 担当部分：4-5『母性・父性・育児性』 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法
(学術論文)				
1 「女性雑誌と性情報—内容分析の手法を用いて」	共著	平成 2 年 3 月	東京学芸大学紀要 第 41 集	青少年の性行動の活発化の背景には、マスメディアのもたらす性情報、特に女子高校生には女性雑誌の中に含まれる多量の性情報が大きな教育力を発揮している。そこで女子高校生によく読まれる女性雑誌を 10 種類(予備調査で選択)選び内容分析の手法を用いて分析し、女子高校生の性意識と性行動への関連を探った。あわせて、高校生の性意識や性行動に雑誌情報のもたらす影響を検証した。本研究は高等学校家庭科での効果的な指導資料として活用することも目的としている。 担当部分：第 2 節 2, 第 3 節 1.2 (p253-p275) 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭、ジェンダー論
2 「援助交際のグレーゾーンをめぐ—考察」	共著	平成 10 年 11 月	東京学芸大学紀要 第 50 集	援助交際は精神的なものを含めて中高校生の売春行為である。1997 年東京都文化生活局の調査、

3 「教科書検定の妥当性に関する考察－1996年高等学校家庭科教科書検定を手がかりに－」	共著	平成10年6月	『子ども社会研究』第4号 日本子ども社会学会 (p51-p66)	1998年深谷・三枝らの調査、1998年福富他調査の3つの調査によればその発生率は4.5%と決して多い数値ではない。しかし、援助交際体験率は僅かでもその周辺に予備軍は存在すると推測できる。そこで調査データから予備軍を抽出してその特性を明らかにできれば、生徒指導や教科指導における効果的な指導に役立つことも視野に入れた分析、考察を行った。 担当部分：第3節 結果 1.2.3 (p45-p48) 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法、ジェンダ一論
4 子どもの遊び	共著	平成11年7月	『モノグラフ・小学生ナウ』vol19-1 ベネッセ教育研究所	1996年高等学校家庭科教科書の文部省(当時)による検定結果で4冊が不合格となった。教科書が偏向することなく妥当性を確保するためにはどのような制度が望ましいのか、教科書のあり方は教育界では争点の一つである。本研究では、不合格となった高等学校家庭科の教科書を手がかりとして、不合格の箇所を複数の判定者に示し、その妥当性を問うことで教科書検定の妥当性を検証しようとした。 担当部分：3. 評価の手続き (p54-p59) 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭
5 「学級の荒れ」をどうとらえるか－教師調査から	共著	平成11年11月	『モノグラフ・小学生ナウ』vol19-2 ベネッセ教育研究所	子どもの遊びの変質が問われて久しい。子どもは遊びを通して家庭を取り巻く近隣社会との関わりを結んでいる。現代の子どもたちはどのように遊んでいるのか、遊んでいないのか。現在の子どもの遊びを生活時間や人間関係など多様な視点から探ることで、家庭生活や地域社会とどのように関わっているか、実態と意識を明らかにすることを目的とした。この実態を明らかにすることで、生活時間の有効な使い方や家族とのふれあい、近隣の人々との関わりやすさや大切さを家庭科において指導する根拠ができる。 担当部分：2. 子どもたちはいつ遊んでいるか (p25-p31)、3. どこで遊んでいるか (p32-p35) 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭
6 消費者としての高校生	共著	平成13年6月	『モノグラフ・高校生』vol62 ベネッセ教育研究所	「学級崩壊」を仮に①学級の「崩れ」、②学級の「乱れ」、③学級の「荒れ」の三段階に分けてとらえることとし、教師調査からその実態を明らかにした。教師はいろいろ課題を抱えているものの、概ね子どもたちを熱心に指導し、教職に魅力を感じている。そして、多くの教師は学級経営や学習指導に教育的信念を持って取り組んでいる。授業の「荒れ」への対応ではベテラン教師の方が苦慮している傾向が見られる。調査から「学級崩壊」を三段階に分けると各段階で特徴的な傾向が見られ、特に初期の①学級の「崩れ」を早期に気づき対応することが、深刻な③「荒れ」を防ぐために重要である。 担当部分：第2章 教師としての意識や子どもの様子 (p16-p32) 【関連授業科目】家庭科指導法
				消費社会の中で生活する高校生の金銭感覚や消費に対する意識や行動を明らかにする。さらに、高校生の将来像と関連させ消費行動の背景を探った。高校生の消費行動の活発さは女子に顕著にみられる。女子は情報収集し、消費行動を主体的に判断し、金銭感覚も堅実である。このような高校生の消費意識や行動は児童期からの生活の中で身につけていることを考えると、家庭科教育において主体的に生きる消費者を育む指導に資す

7 小学生の親子関係	共著	平成 13 年 6 月	「モノグラフ・小学生ナウ」 vol 21-1 ベネッセ教育研究所	<p>るデータである。 担当部分：第 I 章 高校生の消費行動 (p8-p36) 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p> <p>小学校家庭科において、児童に家族の一員として自分を肯定的にとらえ、家族の大切さに気づくことが大切である。その指導の基礎として、現代の母親の実態と子ども・家族への関わりの様態、そして子どもの成長への正負を知ることは大変重要である。そこで、小学校 5.6 年生の母親意識を通して親子関係の実態を明らかにし、母親のライフスタイルの変化や夫婦関係と関連させ母親像を明らかにした。さらに、母親自身の老後の生活と老親の介護に視点をあて、親孝行の意義と母親にとって子どもを持つ意味を探った。このような親子関係と家庭生活の実態を示す知見をもとに、家庭科指導の充実を図ることができる。 担当部分：1 章 サンプルの概要 (p14-p18)、3 章 母親のライフスタイルと生き方 (p28-p50)、4 章 少子高齢社会の中での親子関係 (p51-71) 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法</p>
8 高校生の「つきあい」事情	共著	平成 16 年 11 月	「モノグラフ・高校生」 vol 72	<p>本研究は高校生の性や恋愛のキャリア、異性関係の実態、結婚観や結婚生活での家事育児の分担を含めたライフスタイルの計画を明らかにすることを目的とした。高校生の性意識は開放的になり、性行動も学校中心から情報機器の伸展により学校外の異性関係へと活発化し、男女差が見られない。こうした現状の把握は家庭科教育の指導のあり方や生徒指導に役立つ知見を提供している。 担当部分：7 高校生が異性とつきあうくっかけとつきあいの＜深さ＞ (p17-p20) 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法、ジェンダー論</p>
9 育児不安の構造	共著	平成 17 年 1 月	東京成徳大学子ども学部研究報告 vol 1	<p>本研究は、「育児不安」の構造を母親の育児、母親の学歴、キャリア、生育歴、夫婦関係等から社会的に分析することを目的に、1999 年から東京、地方の農村、ソウル、台北等で調査を重ねた結果をまとめたものである。家庭科教育においては、児童に自分自身の成長とそれを支える家族や近隣の人々との関係を指導する上で貴重な資料となる。 担当部分：第 1 章 母親意識と育児不安の要因分析 (p12-p39) 【関連授業科目】家庭、家庭科指導法</p>
10 生徒の異性関係が問題になったとき	単著	平成 18 年 8 月	『児童心理』金子書房	<p>高校生の性意識や性行動の垣根は低くなり、性や異性とのトラブルから学業成績の低下や逸脱行為、不登校等に発展するケースも多くなっている。高校生の性や異性問題は、異性交際とそれによる妊娠・中絶・性感染症等のリスクと援助交際などの性非行に大別される。そこで、問題となった事例に対して、調査データから高校生の性・異性交際の実態を関連させ、家庭科の教科指導や生徒指導における教師の「性・異性問題」への指導のあり方を示したものである。(p106-p110) 【関連授業科目】家庭、ジェンダー論、家庭科指導法</p>

11 子どもの食生活	単著	平成 19 年 1 月	『児童心理』金子書房 (p56-p61)	<p>ライフスタイルの変化は家族で食卓を囲む機会を減らし、栄養の偏りや不規則な食事、肥満や生活習慣病の増加、思春期の子どもたちの過度のやせ願望や欠食等の問題がみられる。また、BSE問題やカビ、農薬、遺伝子組み換え等による食品の安全性も問われている。このような社会状況下での子どもの食生活の課題を、食卓の風景に視点をあてた調査データから分析した。本調査と比較分析したデータは「モノグラフ・小学生ナウ」vol,13-6「子どもと食生活」である。結果、「ひじきの煮物」や「切り干し大根の煮物」などの伝統的な食べ物や行事食は減少傾向にある。また、食事を通したしつけも十分とはいえず、朝、親が不在で食事をする子どもも多い。一方で、食卓を囲み家族とおしゃべりをしながら食事をすることは「温かな居場所」が家庭にあると感じており、楽しい食事での語らいは子どもの心を支える大切な要因となる。このことはまた、小学校家庭科において食事の役割を知り、楽しく食事をするための工夫を指導する根拠となる。</p> <p>【関連授業科目】家庭、家庭科指導法、食物環境 I、II</p>
12 男の子・女の子の嫌いなところ、好きなどころ	単著	平成 20 年 3 月	『児童心理』金子書房 (p30-p35)	<p>本論は、子どもたちは相手（異性）を通して自分をどうとらえ、どう感じているのか、小学校 5 年生の思いを考察した。男子はまだ、異性をそれほど意識せず、自分たちが男子であることに満足している。これに対して、女子は、男子を異性としてとらえ、自分自身の女性性の成長を自覚している。気になるのは、女子の自己像が陰湿、狭量、表裏の存在があるととらえていることである。それに比べて、男子は暴力的でわがままで無神経で粗野だが暗くはなく、ある意味では健康的な自己像を示している。異性のとらえ方では、男子が女子の長所を「元氣」「頭がいい」「正直、微妙に正直」と指摘し、一方、女子は男子に対しては「小さくて可愛い・幼稚でかわいい」との指摘がみられた。これらの実態をふまえつつ、家庭科指導においてよりよい家庭生活を送るために、仕事の内容と分担を考えるよう指導することができる。ジェンダー的視点からも参考になるデータである。</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導、家庭、ジェンダー論</p>
13 「育児不安」と母親の心理的不適応をめぐる一考察	共著	平成 20 年 3 月	東京成徳大学子ども学部研究年報 vol 9	<p>身体的に母親になっても行動レベルでの育児不適応や心理的に強い育児不適応感を抱く母親たちが増加している。「育児不安」を抱える母親を心理的「育児不適応」状態としてとらえ、この特性を持つ母親の状態を明らかにし、「育児不安」を「抑うつ」や「レジリエンス」との関連で分析を試みた。さらに、これまでの研究で育児不安尺度を作成したが、この尺度の内容を改めて分析すると共に、その妥当性を検証した。</p> <p>SDS 抑うつ尺度を用いると、析出された「高抑うつ群」と「育児不安の強い母親」に高い関連が見出された。また、「育児不安の強い母親」と「レジリエンス」との関連性も高い。尺度の妥当性の検証では、サンプルの属性、地域、抑うつ、レジリエンスとの関連で検証を行い、その妥当性が確認された。</p> <p>担当部分：IV章 育児不安と抑うつとの関係「育児</p>

<p>14 担任は子どもとどう向き合っているか—子どもの目線から</p>	<p>単著</p>	<p>平成 22 年 4 月</p>	<p>『児童心理』金子書房 (p52-p59)</p>	<p>不安とは何か」(p30-p38) 【関連授業科目】家庭科指導、家庭</p> <p>本論は、担任は子どもたちにどのように向き合っているのだろうか、子どもたちは担任にどのような思いを感じているのか、子どもの目線を通して探ることを目的とした。担任イメージは学習指導に熱心で、子どもの心に寄り添いよく世話をしてくれる。一方で、約束や規範を守ることにはやや甘い担任像が見受けられる。担任への満足度は概ね満足しているが、教師や子どもの性別に差が見られる。子どもの好きな先生は、学習指導に熱心でよく世話をし、授業中に笑わせリラックスさせてくれる先生である。学級指導、家庭科指導において、「教師とは」と教師自身にその姿勢を改めて問う内容であり、結果を授業に生かしたい。 【関連授業科目】家庭科指導法</p>
<p>(その他) 学会発表 1 学級の荒れに関する一考察 2</p> <p>2 高校生の家庭科教育への意識に関する考察</p> <p>3 学級・授業の荒れについての考察</p> <p>4 母親の育児不安と父親の育児参加に関する考察</p>	<p>共同</p> <p>単独</p> <p>共同</p> <p>共同</p>	<p>平成 11 年 6 月</p> <p>平成 11 年 7 月</p> <p>平成 11 年 10 月</p> <p>平成 12 年 6 月</p>	<p>日本子ども社会学会第 6 回大会(龍谷大学) 発表要旨集録 (p44-45)</p> <p>日本家庭科教育学会第 42 回大会(国立教育会館) 発表要旨集録 (p46)</p> <p>日本教育社会学会第 50 回大会(東京大学) 発表要旨集録 (p99-p102)</p> <p>日本子ども社会学会第 7 回大会(広島大学) 発表要旨集録 (p68-p69)</p>	<p>調査対象：小学校教師 520 名 調査時期：1998 年 2 月～3 月 発表要旨：授業がうまくいかない状態を「崩れ」「乱れ」「荒れ」の三段階としてとらえ、学級の「荒れ」状態を検証した。学級が荒れていく中で教師の悩みや子どもの成長発達への影響も考察した。 発表者：○三枝恵子 ○戸塚智 深谷昌志 深谷和子 土橋稔 島田美佐江 鶴巻景子 【関連授業科目】家庭科指導法</p> <p>調査対象：公立高校生 1.2.3 年 618 名 調査時期：1998 年 2 月 発表要旨：1994 年高等学校家庭科の男女必修が実施されてから 5 年後の高校生の教科意識に関する調査研究である。調査分析は、家庭科の授業の必要性、授業の楽しさ、家庭科教育に期待すること等の視点で、男女で学ぶ高校生の家庭科教育への思いを分析した。 発表者：○三枝恵子 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p> <p>調査対象：都内の小・中学校の教師を無作為に抽出し 郵送による質問紙調査。小学校教師 520 名、中学校教師 569 名。中学生調査 381 名 調査時期：1999 年 2 月～3 月 発表要旨：平成 11 年日本子ども社会学会の発表では小学校の「授業の荒れ」について考察した。本発表は中学教師と中学生を新たに加え、小・中学校の「学級(授業)の荒れ」の状態をより深く検証し、あわせて「荒れ」を三段階としてとらえる妥当性についても考察した。 発表者：○三枝恵子 ○深谷昌志 ○深谷和子 【関連授業科目】家庭科指導法</p> <p>調査対象：都内の小学校 5.6 年生の母親・父親 560 名 学校通しの質問紙調査 調査時期：1999 年 11 月～12 月 発表要旨：小学校 5.6 年生の母親・父親を対象に、母親になる意味と父親の育児関与の実態を検証した。多くの母親は第一子が 1 歳半くらいまでの育児が最も大変な時期で、悩みや焦りを感じている。この時期の母親は「育児に不慣れで、連続し、疲れている」状態で、こうした状況が育児不安に与える影響は大きい。 発表者：○三枝恵子 ○遠田瑞穂(父親の育児関与) 深谷昌志 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>

5 子どものとらえた学校像に関する考察	共同	平成 12 年 10 月	日本教育社会学会第 52 回大会(北海道大学) 発表要旨集録 (p211-p214)	調査対象：小学校 4.5、6 年生 2056 名。学校通しの質問紙調査 調査時期：2000 年 2 月～3 月 発表要旨：子どもを取り巻く環境の変化が子どもの成長を変化させ、成長スタイルの変容は子どもの勉強のあり方や学校の存在意義を大きく変えている。もはや以前のような学校が地域や家庭への唯一の知的伝達場ではなくなった。このような状況で「学校」は本来の役割を失っているように思える。そこで、こうした環境の中にある学校に視点をあて、子どもたちの抱く学校像と学校の存在意義と価値を考察した。 発表者：○三枝恵子 ○深谷昌志 土橋稔 戸塚智 島田美佐江 【関連授業科目】家庭科指導法
6 育児不安に関する考察 (I)	共同	平成 13 年 6 月	日本子ども社会学会第 8 回大会(明治学院大学) 発表要旨集録 (p69-p70)	調査対象：小学 1.2 年生の母親、父親の 977 名 (都心部 706 名、農山村部 271 名) 調査時期：2000 年 10 月 発表要旨：平成 12 年の日本子ども社会学会では、育児不安を多くの母親が経験する一過性の不安意識で、育児による「不慣れ、連続、疲れ」による悩みや焦りととらえた。本発表では、新たに調査項目を精査し 8 項目の育児不安項目を設定した。その項目を尺度化し、母親のキャリアや学歴、夫や義母との人間関係と育児不安の関連を検証した。農山村部では、いわゆる都市型の育児不安傾向は少ない。 発表者：○三枝恵子 ○深谷野亜 神田和恵 深谷昌志 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭
7 育児不安の国際比較	共同	平成 13 年 10 月	日本教育社会学会第 53 回大会(上智大学) 発表要旨集録 (p146-p179)	調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 706 名 ソウル 524 名 台北 525 名 調査時期：2000 年 10 月～11 月 発表要旨：平成 13 年日本子ども社会学会発表の日本の都心部の調査票を翻訳し、アジアの二都市に調査を拡大し、母親の育児不安について比較検証した。その結果、台北では夫婦で子育てを担うのが一般的で、ソウルでは仕事に追われる夫と家事育児に専念する妻との間で精神的な葛藤が強まっている等、東アジア圏といえども、育児問題には文化的な差異が大きいことが見出された。 発表者：○三枝恵子 ○神田和恵 深谷昌志 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭
8 育児不安の構造分析に関する考察	共同	平成 14 年 6 月	日本子ども社会学会第 9 回大会(岡山大学) 発表要旨集録 (p61-p62)	調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 706 名 ソウル 524 名 台北 525 名 調査時期：2000 年 10 月～11 月 発表要旨：平成 13 年日本教育社会学会の発表では、東アジアの三都市の子育てには文化的差異が大きいことが見出された。本発表では育児不安項目を尺度化し、各都市の育児不安の要因を比較分析した。日本の都心部の母親の育児不安要因は核家族の、専業主婦で高学歴の、夫が育児に無関心な場合に育児不安傾向が高まる。また、父親の育児関与についても三都市を比較分析した。 発表者：○三枝恵子 ○深谷野亜 神田和恵 深谷昌志 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭
9 高校生と性—14 年間の比較	共同	平成 14 年 9 月	日本教育社会学会第 54 回大会(広島大学) 発表要旨集録 (p268-p271)	調査対象：東京・埼玉・千葉の高校生 1426 名 調査時期：2002 年 1 月～3 月 発表要旨：本発表は 1988 年、1994 年、1998 年の調査「高校生の性意識と性行動」の再分析と 2002 年調査との 14 年間の高校生の性意識と性行動の変化を追ったものである。この 14 年間に高校生の性行動は一層活発になり、性意識の垣根が低くなった。特に、女子の性意識や性行動の活発化が目を見え、男子との差が見られず、むしろ積極的である。その背景には、『女子のライフスタイル

10 母親の育児行動と育児不安に関する考察	共同	平成 15 年 6 月	日本子ども社会学会第 10 回大会 (筑波大学) 発表要旨集録 (p74-p75)	<p>『変化』と避妊も含めた正確な性知識と性情報を獲得し、性を主体的にコントロールする女子高生姿がうかがえる。</p> <p>発表者：○三枝恵子 ○深谷和子</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭、ジェンダー論</p> <p>調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 513 名</p> <p>調査時期：2002 年 11 月～12 月</p> <p>発表要旨：これまでの調査票をさらに吟味し、出産前の子育ての自信、妊娠中に考えていたことと実際の子育てのギャップ等を新たな項目として加えた。さらに育児不安の分析に用いた項目も精査し 11 項目とした。そして、回顧する時期を第一子が 2 歳から 3 歳とし、より都心部に限定し調査した。その結果、育児不安を強める要因は、高学歴の仕事を持っていた、核家族で暮らす専業主婦の、子ども好きでない母親で、夫が育児に無関心であることが明らかになった。また、妊娠中の育児の予測と現実の育児とのギャップが大きい母親ほど育児不安傾向が強い。</p> <p>発表者：○三枝恵子 ○神田和恵 馬場康宏 深谷野亜 深谷昌志</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>
11 育児不安に関する国際比較研究	共同	平成 16 年 6 月	日本子ども社会学会第 11 回大会 (九州大学) 発表要旨集録 (p30-p33)	<p>調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 513 名 ソウル 537 名 台北 525 名 フフホト 501 名 青島 598 名</p> <p>調査時期：2002 年 11 月～12 月</p> <p>発表要旨：2002 年の東京都心部の調査票を各国で翻訳し、ソウル、台北、フフホト、青島の 5 都市に調査地域を拡大し比較分析した。その結果、社会構造と文化によって各都市には異なった育児ストレスがあることが明らかになった。東京の母親の育児不安要因は、心理的に歓迎されない妊娠、親性の未形成、育児に不慣れで性格に堅さのある母親、高学歴で職業経験を持つ専業主婦で夫が育児に無関心な母親で、第一子が 3 歳までの短期間に不安と焦りとうつ状態が強くなる特徴がみられた。</p> <p>発表者：○三枝恵子 ○馬場康宏 神田和恵 深谷野亜 深谷昌志</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>
12 母親の育児不安の要因に関する考察	共同	平成 17 年 6 月	日本子ども社会学会第 12 回大会 (大阪市立大学) 発表要旨集録 (p54-p55)	<p>調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 1008 名</p> <p>調査時期：2004 年 11 月～12 月</p> <p>発表要旨：2002 年調査結果から、育児不安の底流には「子ども好きでない」感情があり、それが母親自身の子どもの時代の育ちや家族のあり方と自己形成に関係がありそうなのがうかがえた。そこで、新たな項目として子ども好きでない感情、自尊感情、母親自身の生育歴や家族関係、実母との関係、現在の子育てと子どもへの教育期待や子どもの将来などの項目を加えて調査実施した。地域はより都心部に限定した。その結果、育児不安は母親自身の子どもの時代の育ちや実母との関係、家族のあり方が大きく影響することが検証され、育児不安の強い母親に育てられた母親は育児不安傾向が強く、世代間連鎖が認められた。</p> <p>発表者：○三枝恵子 馬場康宏 朴珠鉉 深谷野亜 深谷昌志</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>
13 母親の育児不安の構造に関する考察	共同	平成 18 年 6 月	日本子ども社会学会第 13 回大会 (東京成徳大学) 発表要旨集録 (p42-p46)	<p>調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 723 名 農山村部 995 名</p> <p>調査時期：2005 年 11 月～2006 年 1 月</p> <p>発表要旨：本調査で育児不安項目をさらに精査し 10 項目とし、母親の育児行動や育児文化を新たな視点として加え、育児不安が母親の育児行動や</p>

14 三都市の母親の育児行動と意識に関する考察	共同	平成 19 年 6 月	日本子ども社会学会第 14 回大会 (昭和女子大学) 発表要旨集録 (p72-p75)	<p>母親意識に与える影響を検証した。育児不安の構造は「子ども好きでない」「親性が未形成」「子育てが楽しくない」「性格の堅さや社会性のなさ」「自尊感情の低下」「伝統的価値観や性役割受容ができない」等の心的要因と環境要因としての「属性」「就労体験」「出産後の体調の悪さ」「子育ての大変さと苦労」「夫が育児に無関心」等が絡み合って構成される。育児不安の強い母親は子どもが小学生になった現在でも育児に困難を感じ、悩みや焦りを抱えており人間関係にも問題があることが明らかになった。</p> <p>発表者：○三枝恵子 ○馬場康宏 朴珠鉉 深谷野亜 深谷昌志</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>
15 「子どものケータイと学校裏サイト」対応に関する学会調査	共同	平成 20 年 6 月	日本子ども社会学会第 15 回大会 (松山大学) 発表要旨集録 (p97-p104)	<p>調査対象：都心部の小学 1.2 年生の母親、父親の 723 名 農山村部 995 名 ソウル 531 名 台北 1246 名 天津 496 名</p> <p>調査時期：2005 年 11 月～2006 年 1 月</p> <p>発表要旨：2005 年東京都心部の調査までの調査項目を精査し調査を繰り返した結果、東京の母親の育児不安構造を明らかにした。そこで、本調査ではソウル、台北、天津に調査地域を拡大し、子育てにおける特性を比較した。共通する特性は、子育ては大変で疲れることも多いが、子どもは可愛く、子育ても楽しく、親になったことをプラスに評価する母親像が見出された。一方、ソウル、台北、天津の三都市と東京の母親を比較すると、専業主婦で子育てを担い、母親になることを高く評価し熱心に母親役割を果たそうとしている姿が特徴的である。また、子育て前乳幼児の世話や触れあう体験がほとんどないことも顕著にみられた。家庭科教育では乳幼児との触れあい等の体験を重視した授業を工夫し充実を図りたい。</p> <p>発表者：○三枝恵子 ○朴珠鉉 馬場康宏 深谷野亜 深谷昌志</p> <p>【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p>
16 育児の外部化に関する意識調査	共同	平成 21 年 7 月	日本子ども社会学会第 16 回大会 (中国学園大学) 発表要旨集録 (p57-p59)	<p>調査対象：全国調査 全国中学校を 1/20 に無作為に抽出し、郵送による質問紙調査。全国 43 都道府県 179 校より回答 (回収率 32%) 179 校中学生調査の協力が得られたのは 61 校 (各学校で中学 2 年生 1 クラス実施)</p> <p>調査時期：2008 年 2 月～3 月</p> <p>発表要旨：本発表は日本子ども社会学会の共同研究調査である。特定の学校や学級を対象としたホームページ、ネット上の掲示板などいわゆる「学校裏サイト」に関連した生徒間のトラブルが発生し社会問題化している。そこで、生徒のネット上のトラブルとケータイに対する学校対応の実態を分析し、今後の対応策を検討するものである。</p> <p>発表者：○高旗正人 ○三枝恵子 ○須田康之 ○深谷和子 ○西本裕輝 ○深谷昌志</p> <p>調査対象：都内公立小学校 1.2 年生の親 630 名。長野県 A 町の公立小学校 1.2 年の親 269 名。</p> <p>調査時期：2009 年 2 月～3 月</p> <p>発表要旨：本発表は、現在、家族の機能が縮小し低下していると指摘されている。それにより家族の機能で最後まで残されるといわれる愛情領域にも変化が生じているのか。親子関係に視点をあて考えると、共働きの増加や親の意識の変化にともない家事・育児と愛情との関係も変化していると推察できる。そこで、家族の機能の外部化が進む中での親子関係と愛情について考察することを目的とし、都心部と祖父母の同居率も高い長野県 A 町に質問紙調査を実施し比較検証した。このような家族の機能と家庭生活の実態を示す知見をもとに、小学校家庭科指導の充実を図ることが</p>

<p>17 子どもの目がとらえた教師像の変化</p>	<p>単独</p>	<p>平成 22 年 7 月</p>	<p>日本子ども社会学会第 17 回大会 京都女子大学 発表要旨集録 (p81-p82)</p>	<p>できる。 発表者：○三枝恵子 ○深谷野亜 朴珠鉉 【関連授業科目】家庭科指導法、家庭</p> <p>調査対象：21 年調査（東京・横浜・埼玉・富山の公立小学校 4.5.6 年生 381 名。平成 6 年調査（東京・千葉・仙台・富山の公立小学校 4.5.6 年生 2588 名。</p> <p>調査時期：21 年調査は平成 21 年 10 月～12 月 平成 6 年調査は平成 6 年 7 月。</p> <p>発表要旨：調査項目には平成 6 年調査の項目 1/3 と新たな項目を加え平成 21 年に調査実施した。</p> <p>本発表は、担任は子どもとどう向き合っているのか、子どもたちは担任にどのような思いを感じているのか。結果、子どもたちの担任イメージは概ね良好で学習指導に熱心で子どもの心を支えている姿が見られる。15 年間の教師像の変化では、子どもの心に寄り添い子どもを励ますサポーター的教師が増加している。本データは、家庭科指導法の授業で生かしていきたい。</p> <p>発表者：○三枝恵子 【関連授業科目】家庭科指導法</p>
----------------------------	-----------	--------------------	--	---

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。